

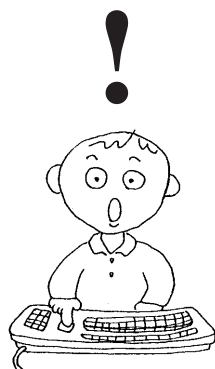


いま、職場・学校そして家庭の机の上にあるパソコンで当たり前になっているコンセプトのいくつかはあるときまで、誰も気付いていないことであった。新しいものに出会ったときの驚き。笑われるかもしれないが、私の経験からそのいくつかを紹介しよう。

私が入社したのが1978年。当時、漢字などを表示する端末はなかった。カナを表示する端末が日本語端末と呼ばれていた。そして、グラフは+や／、*などの記号を駆使(!)してそれなりの棒グラフ、帯グラフや折れ線グラフを表示していた。はじめて漢字が表示される端末を見たときにはびっくりした。ははあ、コードを2バイトにすることで文字種の多いことが回避されるのかと。また、グラフィックディスプレイをはじめて見たときの驚き。キャラクタで苦労して表示したグラフはなんだったのかと。

驚く心を持ち続けたい

辻 洋
日立製作所



そして、その翌年であったか、ワープロとの初対面。かな漢字変換などなくて、タブレットから一字一字拾わなければならなかった。A4用紙1枚を作成するのに丸一日を要してしまった。そのとき、ワープロなど一生使うものかと思った。けど、現在ワープロのない仕事は考えられない。かな漢字変換のなかった時代を知らない人は感じれない驚きを私は持っている。この技術は日本人の仕事の形態を大きく変えた世紀の発明だと思う。

80字×24行のキャラクタディスプレイでプログラムを編集するために画面分割を行うフルスクリーンエディタを使っていた。あるとき、ビットマップディスプレイの中に紙のように見えるマルチウィンドウを見たときの驚き。確か目を回してひっくり返ったように思う。そして、マウス。なんだ! これは、デスクトップとかバインダそしてごみ箱というコンセプト。ユーザインタフェース研究の面白さ・深さを感じた。

スプレッドシートを見たのもその頃。計算式をデータとして埋め込むモデリングを考えたのは誰だ! と思った。後で聞くと、化学関係の学生さんで何回も繰り返し計算するレポートに辟易としていて考案したということであった。必要は発明の母ということであろうか?

そしていま。計算機はどんどん小さく軽く安価になってきた。どこにでもマルチメディアを取り扱える計算機があるようになった。最近の驚きについては、まだ私だけの秘密。これから新しいものに驚く心を持ち続けたい。

